The Journal of Kamakura Women's University, Vol.25, pp.35-48, January 2018

原著論文

進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック

大野　和男（児童学科）

Importance of Nursing Practice and Educational Practice in Career Determination and Reality Shock in Practical Training

Kazuo Ohno
Department of Child Studies, Kamakura Women's University

Abstract

This paper focuses on 42 students who plan to qualify for childcare, as they have an important opportunity to form their identities as nursery teachers and to decide on places of employment. I examined the reasons for career selection before and after practical training, and the reality shock that occurred during practical training. The highest percentage of students were those who considered job placement in terms of either working with children or not, and made their decisions after all practical training was completed.

During training, many people experienced some type of reality shock, especially those in their first childcare practice. However, most students have overcome such reality shocks and plan to attain a job in either field.

Key words: getting a job, practical training, reality shock（欧文キーワード）
キーワード：進路決定、実習、リアリティ・ショック

Ⅰ．問題

保育者養成系の学科で学んでいる学生の多くは、その学科を選択する際に、将来の進路をある程度考慮して入学してくる。しかし、最初からそのイメージは明確なわけではないことが多い。保育者養成校におけるカリキュラムが将来の進路に深く結びついているため、その中で保育者としての知識や技術を習得していくと同時に、「保育者である自分」と向き合い、保育者である自己を自覚し成長することが課題となる。この過程は、保育者志望学生における「保育者アイデンティティ」と呼ばれている（小泉・田爪，2005）。ただ単に理論や技術を学ぶことだけでなく、保育者としてのアイデンティティを確立していくことは、学生が「保育者になる」上で重要である。大野・小泉（2014）によれば、1・2年生と3・4年生の間には、「保育者アイデンティティ」の差があるという。そして，その差の要因として実習があるのではないかと推測している。さらに、大野・小泉（2014）は、実習を経験する中で保育という仕事の重要性を理解している学生は、保育という職業についてより深く考えるようになっていると指摘している。

特に、学生が保育者を志し、保育者アイデンティ

ティを確立していく中で、実習の果たす役割は大きい。実習とは、理論的側面、技術的側面から学生自身が子どもに対する理解や実習施設への理解を深めていくことを、身をもって体得していく過程である（松本，2008）。実習の重要性に関しては、「習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させること」が示されている（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長，2015）。

大野・小泉（2016）によれば、実習前に学生が不安や心配なことについて、「責任実習」「日誌の書き方、まとめ方」「保育者としての必要な技術」「大学での学習態度」といったことに対して不安や心配に思っている割合が高い。田爪・小泉（2009）は、保育者を対象として質問紙調査を実施し、指導保育者の持つ実習生に対するイメージについて検討している。その結果、保育者が実習生を受容しているか否かが保育者の持つ実習生のイメージ及び実習生に対する不安に影響を与えていること、実習生に基礎的な保育技量があるか否かが保育者における実習生に対する困難さの主な要因であることを明らかにしている。保育指導者は、実習生に対して、保育者としての基本的な態度や保育技量は実習前に、子どもへ関わる力量は実習の中で獲得することを期待していたが、保護者とのかかわり、環境構成、発達に問題を持つ子どもへの対応については、就職後の課題として認識していた。この点に関して、大野・小泉（2016）は、学生が保育者の能力や技術の習得時点をどのように考えているかについて検討している。学生は、「保育者としての明るい性格」「保育者として必要な体力」「社会人としての常識、礼儀作法」といった、どちらかというと学習によって身につくものではない、元々持っているべき素質を実習前に習得しているべきこととして考えていた。これには、「ピアノで弾き歌いをする力」など、長い時間をかけて身につけるべきものも含まれる。それに対して、実習中に習得すべきこととして多くの者が考えていることは意外に少なく、「日誌を書く技術」「環境を構成する力」「子どもの食事への指導」「子どもを観察する技術」「子どもと遊ぶことができる力」であった。

実習においては、保育者アイデンティティを形成していく中でプラスのことばかり経験するわけではない。保育者になることを迷ったり、やめてしまうことも起こりうる。このことに関して、谷川（2010）は、「リアリティ・ショック」という概念を用いて、実習における戸惑いや葛藤と、それに伴う学生の保育に関する認識の変容プロセスを捉えることを試みている。

リアリティ・ショックとは、Marlene Kramer（1974）によって提出された概念である。Kramerによれば、リアリティ・ショックとは，自分の職業に対して向上心を持って望む人が，職場の現実と自らの職業的な理想や価値との間に生じるズレによって、うまくいかない、あるいは成果が得られないと感じたときの反応を指す。

谷川（2010）は，分析の結果、リアリティ・ショックを伴う問題状況における学生の認識の変容には、子どもの理解の発展というプロセスを経るものと、ショックからの回避というプロセスを経るものの2つを見出している。これらのプロセスは対照的であり、学生がどちらのプロセスをたどるかは実習先の保育者との出会いのあり方に規定されており、そのあり方が実習内容の質に大きな影響を与えることを示している。

それでは、ほとんどの学生は、保育実習・教育実習を経験する中で、最終的にどのように就職先を決定していくのであろうか。実習中における経験がその後の保育者アイデンティティの形成に大きな影響を与え、「保育者としての自分」についての考えが深まり、就職先を決定していると思われる。

そこで、本研究では、実習前後の進路の方向性をとらえつつ、実習中に学生がリアリティ・ショックを経験しているのかを検討し、そのことが保育者としての進路に影響を与えているのかについて検討する。

Ⅱ．方法

1．調査対象者及び調査時期

本調査の対象者は、4年生の保育者養成校に在籍し、幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格を取得見込みである4年生42名である。よって、実習の機会は，保育実習1回目（保育所），保育実習2回目（保育所・居住型施設）、教育実習（幼稚園）の3回であった。調査は、対象者に調査の意図を説明し、了承を得ている。調査時期は、これらの実習が全て終了した、2014年10月末日である。

2．調査内容

上記の実習ごとに、実習の前後で進路に対する考えを聞いた。また、それぞれの実習中に、リアリティ・ショックを感じたことがあったかどうか尋ねた。なお、保育実習2回目には、居住型施設における実習が含まれるが、今回の分析では除外した。

Ⅲ．結果

1．就職の方向性

（1）現段階の就職状況（Figure 1）

幼稚園・保育所・一般企業という分類で質問すると、最も多かったのは，保育所に就職が決定している者33.3％と保育所を予定している者19.0％を合計して52.3％であった。ついで多かったのは、幼稚園に決定している者28.6％，幼稚園に就職予定の者4.8％を合わせて33.3％であった。10月末時点で進路に迷っている者の割合が7.1％、1名存在した。このことから、対象者の多くは、就職先として、資格を活かした仕事を選択していると言える。

（2）実習前後における就職希望の変化

Figure 2に，実習前後における進路先についての考えを整理した。全体を通して最も多いのは、「幼稚園教諭・保育士どちらかになろうと思っていた」という者である。そして，教育実習後には、その割合が約半分くらいになっている。学生は、幼稚園教諭・保育士のどちらかになろうとは思っているが、実習を全部経験してから決めるという者が最も多いのではないかと思われた。

また、保育実習1回目前に「幼稚園教諭」を進路として考えていた者がその実習後には減少し、幼稚園教諭・保育士のどちらかという者が増加している。これは，多くの学生は，保育実習を行うことによって，保育所を進路として考えてもいいと考えが広がったことを示していると思われる。

それに対して、保育実習2回目に関しては、それほど大きな変化は見られなかった。2回目の保育実習では、同じ保育所で実習を行うことが多く、実習の内容や実習園の様子もわかっていての実習であるので、変化は少ないという結果に表れているのではないだろうか。

しかし、教育実習においては、その前後において、変化が見られた。教育実習後には、幼稚園教諭・保育士希望の学生が増加し、どちらかを考えている学生に割合が大幅に減少した。

こういったことから、対象者は、取得を希望した免許・資格の実習をすべて終え、つまり現場を全て経験してから進路を決定しようと考えている者が多いと考えられる。

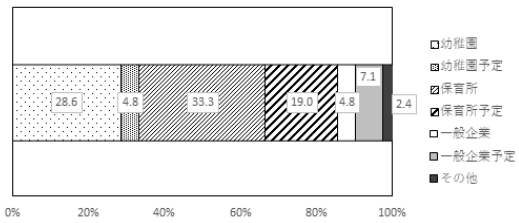

Figure 1.　就職状況（10月末時点）

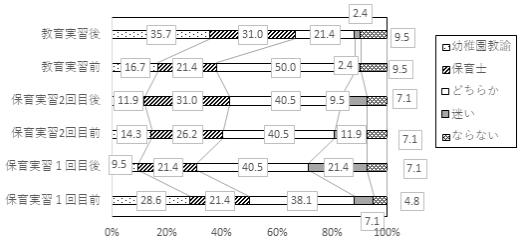

Figure 2.　実習前後の就職希望の変化

2．実習前後の進路についての選択理由

（1）保育実習1回目前後の進路先選択理由

Table 1に保育実習1回目前の進路希望別にその理由を示した。ここに挙げられた理由を見ると、「夢や憧れ」といった漠然とした理由がどの進路先に関しても挙げられることが多かった。

それに対して、Table 2に保育実習1回目後の進路別の理由を示した。実習を経験した後ではその理由の内容がより具体的もしくは詳細になっているのがわかる（Table 2）。保育士を進路としてこの時点で考えているものにおいては、やはり、肯定的な理由が多いと思われた。どちらかを考えている者は、幼稚園教諭を考えていたが保育実習に対して肯定的に捉えていると思われる理由が多い。迷っている理由においては、幼保どちらかで迷う者と保育者としてやっていけるかどうか疑問に思い始めていると思われる者が含まれた。

（2）保育実習2回目前後の進路先選択理由

保育実習2回目前の進路先についての考えを示したのがTable 3である。進路にかかわらず、1回目の実習の印象を受けての理由を記述していることが見てとれた。

その中で、保育士志望の学生に関しては、保育に関して前向きの理由が語られている。1回目の実習において、本人なりに充実感を味わい、楽しいと感じたことで、保育士志望という考えを維持できていると思われた。

Table 1. 保育実習1回目前における進路先選択理由

①幼稚園教諭希望
幼い頃からの夢や憧れが幼稚園教諭であった。
自分が幼稚園出身。
保育士についてよく知らなかった。
子どもに携わる仕事につきたいと思っていた。
大学進学時に、幼稚園教諭を志望していた。
保育園の生活リズムが自分には向いていないと思った。
②保育士志望
子どもとかかわることが好き。
自分が保育園出身。
大学進学前、保育士を志望していた。
乳児が好き。
遊びの中で、子どもとともに成長し、学ぶことができる保育園が自分の保育理念に合っていると思った。
③幼保どちらか
幼い頃からの夢や憧れが子どもに携わる仕事につくことだった。
保育者を目指そうと考えていた。
「子どもはかわいい、子どもが好き」と思った。
どちらになるかは決めていなかった。
実際の保育現場を詳しく知らなかった。
乳児が好きなので保育士になりたいと思っていたが、幼稚園の先生にも魅力を感じていた。
幼児園の実習を受けてから、自分がやりたい、合っている方を見つけたかった。
保育の大学に進学したため。
資格をとるから。

Table 2.　保育実習１回目後における進路先選択理由

①幼稚園教諭希望
幼い頃からの幼稚園教諭になるという夢や憧れの気持ちが大きかったから。 職員間での引き継ぎなど、長く子どもを保育する上で大変な部分を感じてしまったから。 幼い頃からの幼稚園教諭になるという夢や憧れの気持ちが大きかったから。
②保育士志望
実際に保育士の仕事を体験し、子どもたちと過ごす時間も長く、楽しかったから。 先生方の人間関係や大変そうな場面を見たが、保育士になりたい気持ちに変わりはなかった。 実習を行い、子どもたちと接することで保育士という仕事にやりがいを感じた。 保育士が自分に一番合っていると思った。 １回目の実習は楽しかった。 自分の課題の多さにショックをうけることもあったが、子どもを好きという気持ちを改めて感じることができた。 乳児の保育に魅力を感じた。 子どもの成長を見られ、子どもが成長していく過程を見守りたいと感じたから。 複数担任で子どもを見ることが良いと思ったから。
③幼保どちらか
幼稚園実習を終えてから考えようと思った。 実習がとても楽しく、乳児がかわいいと感じ、保育士に魅力を感じた。 どちらかになりたいと思っていたが、まだ決めきれなかった。 先生方が優しく指導してくださったから、保育士もいいかもしれないと思った。 保育士の方が子どもとかかわる時間が長いから。 それしか進路はないと思った。 思っていたよりも難しいことが多く、保育士になりたいという気持ちが薄れてしまった。 保育士の仕事が楽しそうだった。 やりがいのある実習だった。 素晴らしい仕事だと思った。
④迷い
体力的にきつかったので、自身がなくなった。 自分の思想や授業で学んできたことと実践の場では、遥かにレベルや求めるものが上だった。 子どもがかわいかったから、保育士も魅力を感じた。 仕事として自分が就職したときにできるのか不安になった。 子どもは可愛かったが、先生同士は怖く、こんな職場で働けるか不安になった。 自分には不向きではないのかと思ってしまった。 思った以上に仕事量や責任が重い。 どちらかには就職したいとは思って迷った。
⑤なることはない
収入の多い方がプライベートも多くのことに挑戦できると確信した。 保育士間の関係が良くなくて、楽しさはあるのか疑問を感じた。 自分のしたいことと違っていたから。 嘘をついて実習生になすりつけてきたり、親の悪口を子どもの前で堂々と話していてありえないと思った。

Table 3. 保育実習 2 回目前における進路先選択理由

①幼稚園教諭志望
幼い頃からの夢や憧れが幼稚園教諭であった。
自分が幼稚園出身だった。
1 回目のときに、乳児とのかかわりに難しいと感じた。
保育園の生活リズムが自分には向いていない。
1 回目の実習で大変さを知り、保育時間の短い幼稚園がいいと思った。
②保育士志望
保育園のほうが合っていると思った。
子どもとの関わりがより蜜になると思った。
1 回目の実習後から保育士に対する興味が薄れなかった。
1 回目の実習が楽しかった。
③幼保どちらか
資格を活かせばスムーズに就職できると思った。
1 回目の実習で嫌だと感じることはなかった。
両方の実習を終えて決めたいと思った。
1 回目の実習で難しさを味わった。
ここでやめる訳にはいかないと感じた。
子どもとの距離感が難しいと思った。
1 回目の実習で指摘されたことに注意し、準備をした。
④迷い
1 回目に体力的にきついと感じ、実習に行くのが怖かった。
1 回目の実習で不向きなのではないのかと思った。
⑤なることはない
一生この職業でやっていけないと思った。
1 回目の実習で嫌だと感じた。

幼稚園教諭志望の学生においては、1 回目の保育実習において適正に疑問を持ったり、もともと幼稚園教諭を志望している者が存在した。

迷いが生じている者、なることはないと思っている者においては、1 回目の実習における否定的なイメージが強いような記述が見られる。

Table 4 には、保育実習 2 回目後の進路選択の理由を示した。概観すると、1 回目の理由より記述された内容がより深まっているように思われた。

幼保どちらかを考えている者に注目すると、自分の成長がキーワードとして考えられる。2 回目の実習において、自分の成長など、充実感を得た理由が多く挙げられた。

それに対して、保育者になることに迷いが生じた者やなることはないと考えた者に関しては、2 回目の保育実習で充実感を感じることができなかったのではないかと推測された。

Table 4.　保育実習 2 回目後における進路先選択理由

①幼稚園教諭志望
幼い頃からの夢や憧れが幼稚園教諭であった。
自分が幼稚園出身だった。
休みが少なく、保育者が大変そうだった。
②保育士志望
2 回の保育実習を通して、保育士というものを深く知ることができ、何よりも子どもといて楽しかった。
1 回目の実習より、多くのことが学べて身についたと感じた。
保育実習が楽しかった。
部分実習を行い、保育者として子どもの前に立つことの楽しさややりがいを知ることができた。
子どもと関わる時間が長いので、一人ひとりの子どもと深く関われた。
複数担任で子どもを見ることが良いと思った。
③幼保どちらか
責任実習をうまくできずに終わってしまったが、子どもとの関わりや先生方の優しさから、保育士も良い職業だと感じた。
2 回目の実習で高度なレベルを求められ、迷ってしまった。
それしか進路はないと思った。
幼稚園の実習も終えてから考えようと思った。
保育園も楽しいと感じた。
責任と仕事だけでなく、精神も使うから。
仕事としてあまり嫌ではないし、続けられる気がした。
保育時間も長く、子どもとの絆が深まり、楽しいと感じた。
辛かったが、自分の力になったと感じた。
1 回目の実習よりも、自分が成長したと感じられた。
④迷い
1 回目とは違った実習だったこともあり、考えるようになった。
1 回目と同様、実習と通じて辛いと感じ、自分が仕事としてできるのか不安になった。
責任実習をして、保育士に向いていないように感じた。
職業としてまでしたいと思わなかった。保育士同士のいじめなどを見てやっていけないと感じた。
⑤なることはない
自分が一生この職業をやっていけないと思った。
自分には向いていない、やていけないだろうと思い、不安のほうが上回ってしまった。

（3）教育実習前後の進路先選択理由

Table 5 には教育実習の進路選択別理由を示した。幼稚園教諭を考えている者の理由においては、「夢や憧れ」「元々の志望」「幼稚園出身」といった大学に入学する前からの考えが反映しているものと、保育実習を経験した上で幼稚園教諭を考えているものが存在する。

保育士志望の者は、保育実習を行ったことで、保育士の魅力が高まったこと（例えば、「信頼関係が築ける」「実習が楽しかった」「就職が決まっ

Table 5. 教育実習前における進路先選択理由

①幼稚園教諭志望
幼い頃からの夢や憧れだった。
大学進学時に志望していた。
子どもが好きで、子どもに関わる仕事がしたかった。
自分が幼稚園出身だった。
母園で働きたいと思った。
保育実習を経験して、より幼稚園教諭になりたいという気持ちが高まった。
保育実習を終え、よりなりたいと思ったから。
②保育士志望
保育士のほうが、子どもとの保護者との信頼関係が築け、実習園の雰囲気が良かった。
保育実習を終えて、保育士の方がいいかもしれないという気持ちがあった。
保育士になることへの気持ちに変わりがなかった。
保育実習が楽しかった。
保育実習、保育園でのアルバイトが楽しく、保育園で働きたいと思っていた。
乳児が好きで、長時間関われると思った。
保育園に就職が決まっていた。
日案だけでA 3 用紙 9 枚分を毎日提出しなければならず、心身への負担が大きすぎた。
ピアノが苦手なため、幼稚園教諭は向いていないかもしれないと思った。
③幼保どちらか
保育士志望であったが、保育実習を通して、幼稚園実習をしてから考えようという気持ちに変わった。
元々、幼稚園教諭を目指していた。
保育実習では保育士の良いところが見つかり、幼稚園教諭に関しては幼い頃からの夢であったので、実習が楽しみだった。
幼稚園という場が未経験であり、保育園よりも保育時間が短いという勤務体制に興味があった。
なろうという意思を持ち、準備もきちんとしていたから。
両方の実習を終えてから経験したことを踏まえ、進路を決めようと思った。
幼保どちらかは迷っていたが、子どもに携わる仕事につきたいと考えていた。
④迷い
今まで幼稚園に就職することは考えていなかったが、保育士になることも迷っていた。
⑤なることはない
一般企業に内定をもらっていた。

ている」）ことと幼稚園教諭よりも保育士の方が向いていると考えるもの（例えば、「ピアノが苦手」「日案に対する心身への負担」など）が見られた。

Table 6 に教育実習後の進路選択の理由を示した。幼稚園教諭を志望している者は、「やりがいを感じた」「達成感」「魅力を感じた」など、その内容に肯定的なものが多かった。それに加えて、実習先の幼稚園教諭の素晴らしさ（例えば、「子ども、保護者、他の先生のことを考えている」

Table 6.　教育実習後における進路先選択理由

①幼稚園教諭志望 実習が楽しく、やりがいを感じた。／達成感を感じた。 幼稚園の方が自分に向いていると思った。／教育的な方が自分に合うと思った。／幼稚園での教育がしたいと思った。 先生と子どもとの関わりを見て、先生の子どものへの愛をとても感じた。 乳児の方が好きだけど、幼児の方が会話もでき、楽しかった。 子どもだけでなく保護者のこともしっかり考え、他の先生のことも考えていたので、自分もこういう仕事がしたいと思った。 実習自体がとても楽しく、ピアノを弾いて歌を歌い、保育園ではあまりなかった設定保育を行っていたところなど、魅力を感じた。 保育実習も楽しかったが、教育実習は時間や内容がはっきりとしていて充実していた。 行事の準備やその日のプログラムに追われても、自分のクラスとしての色が出せることが良さだと思った。 嫌なことがあったとしても、それでもなりたいと思った。 実習の中で一番大変だったが、楽しいと感じることが多くあった。
②保育士志望 保育園で働く方が自分に合っていると思った。 乳児の保育がしたいと思った。 両方の実習を比較したとき、保育士として働こうと思った。 子どもといる時間が長く、シフト制が合っている。 幼稚園の機能が合わないと思った。 幼稚園は事務的な作業が多く大変だと思い、子どもと長く関わっていきたいと思った。 自分のピアノの技術では役に立たないと感じた。 一人担任という責任に耐えられないことや、仕事量が多すぎて自分への負担が大きくなりすぎてしまった。 給料と仕事の大変さが見合っていない。
③幼保どちらか 幼保とも、どちらもいいところ、大変なところがあるけれど、それでも子どもと関わる仕事がしたいと思った。 保育士志望だったが、幼稚園教諭もいいと思った。 １人で子どもを見る人数も多く、事務仕事や準備も大変であることがわかったが、その分やりがいも大きいと感じた。 やりがいのある仕事につきたいと思った。 実習を重ねるごとに成長し、少しずつ自信がついたから。 働く園の条件によって進路を決めようと思った。 先生方からとても優しく、たくさんのことを教えていただき、とても勉強になったため、自分もさらに勉強をして先生のようになりたいと思った。
④迷い 時間外労働が多く、自分の時間がとれないと感じた。 一般企業に内定をもらっていた。
⑤なることはない 実習中経験したことから、なることはないと感じた。

「優しく接してくれた」など）や、職務に対する魅力（例えば、「自分のクラスの色が出せる」「幼稚園での教育がしたい」など）というような理由も挙げられた。

それに対して、保育士を志望している者は、幼稚園教諭には向いていないから保育士という理由（例えば、「ピアノの技術」「幼稚園が合わない」「一人担任という責任」など）と、保育士を積極的に志望しているもの（例えば、「子どもといる時間が長い」「シフト制がいい」など）が理由として挙げられた。

どちらかになろうと考えている者は、保育実習・教育実習の両方を経験してみて、どちらの良さにも気づいたと思われる内容が多かった。その中には、実習を繰り返す中で自信がついたというもの、良さだけではなくて大変さもあるが、それでも子どもと関わる仕事を考えているなど、非常に肯定的な理由が示された。

3．リアリティ・ショック

（1）実習中のリアリティ・ショックの有無

これを示したのが Figure 3 である。保育実習 1 回目において、リアリティ・ショックを感じた者の割合が 6 割以上と 3 回の実習の中で最も多かった。実習自体初めてということもあり、戸惑いを多く感じた結果であると思われる。2 回目の保育実習に関しては、4 割前後とその割合がかなり減少している。

そして、教育実習においては、45.2％と、保育実習 2 回目よりは多くなっている。実習自体は初めてではないというものの、実習先としては初めての幼稚園ということで新たな環境になじむのに保育所とはまた違った印象を持つことが多いからと考えられる。

（2）リアリティ・ショックの内容

学生は、実習において、どのような理由からリアリティ・ショックを感じるのであろうか。特に、保育実習 1 回目と教育実習におけるリアリティ・ショックの内容を取り上げてみたい。記述された理由から、どちらとも、①保育者の子どもとのかかわり、②保育者の実習生への態度、③保育者同士の関係、④職務、の 4 つに分けて整理した。これらを示したのが Table 7（保育実習 1 回目）と Table 8（教育実習）である。なお、保育実習 2 回目の保育所での実習に関して、新たに挙げられ

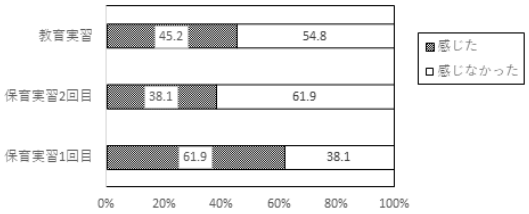

Figure 3. 実習中のリアリティ・ショックの有無

Table 7. 保育実習 1 回目におけるリアリティ・ショックの内容

①保育者の子どもとの関わり
午睡中の保育者がこわい。
自由遊びの時、先生は他の仕事をして、あまり子どもと遊んでいる姿が見られなかった。
子どもへの注意の仕方や怒り方が少しきつく感じたり、乱暴すぎるのではないかと感じることがあった。
年長クラスにもなると、何でも自分たちでできるようになったり、考えて行動できるようになったりするが、子どもの失敗に対して先生が割と厳しく叱っていたこと。年長さんであるといってもまだ子どもなので、そこまで厳しく叱ることはないと思っていた。
1 歳児が泣いている中、無理矢理力づくで寝かしつけようとしていて、外から見たらたたいているように見えてショックをうけた。
子どもへの言葉かけが、鋭いと感じる先生がいたため。
時間で子どもを管理するところ。子どもを管理するように感じたから。
保育士が自分の好きではない子どもの話をしていたとき。

（次頁へ続く）

（Table 7. 続き）

②保育者の実習生への態度 先生方は、全員明るく誰に対しても思いやりがあった。 保育者は挨拶を必ずする人であると思っていたが違った。質問をすると嫌そうな顔をされる。挨拶をしても返してくれない人がいた。 初の現場でわからないことだらけで優しく指導してくださった人がいたが、ただただジャマだと表してくる保育士がいて、大変だった。 先生によって指導や支援の仕方が全く違ったり、学校で習った（けがの）対処法と違う対処法を行っていたり、「どうしよう」「これでいいの？」ということが多々あった。 不安だったことについてはとくに問題なかったが、問題ないと思っていたことについて助言されることが多かった。 保育実習の時、休憩中の時、職員同士が話しているところに居場所がないと感じた。 1 週間配属された配属されたクラスの担任の先生が本当に優しくて救われた。
③保育者同士の関係 職員同士での悪口。 保育士の先生方の会話や関係（悪口など・・・）を見て、保育以外にも大変なことがあると感じた。 保育士も一人の人間なんだなと思った。 先生同士の上下関係の大変さ。 保育士さん同士の裏の顔を見てしまった。 職場の人間関係。 先生間の不仲を見ていたのでそれがマイナスだった。辛そうなイメージ。 教員内での考え方のちがい。 先生同士の関係がいろいろ見えて少し嫌だった。（笑）
④職務 同い年で発育発達が大きく異なっていることに驚いた。 指導案に進め方や子どもの反応を書いても、全くその通りにならない。臨機応変な対応が重要。 日誌が思っていた以上につらかった。 初めての実習で授業だけではわからなかった、子どもとの関わり方、大変さを知ったから。 机の上で学ぶのと実践的なものは違い、特に自分で自分の思っている以上に広い視野、命を扱う面での危機感が求められていること。子どもが好きだけでは通用しないこと。 想像以上に体力が必要であること。腰も痛くなるし、膝にはあざだらけ。結構肉体労働だと思った。 子ども達と過ごすだけでなく、他の仕事も山ほどあって仕事の量に衝撃的だった。 ただかわいいってだけではやっていけない。保育実習で 0 歳児に入り、食事の介助や着替えの手助けなど難しいことばかり過ぎて、何もかも思っていたのと違った。保育実習 1 回目は楽しいと思えなかった。 ただ子どもが楽しく遊べているか見守り援助するだけでなく、一日、一週間、一年間を通して密な計画をしていて、奥が深いと感じた。 子ども同士のトラブル（一緒に遊んでいてケガをする。乳児クラスで噛みつきのある子に出会った等）が想像していたよりも多いことが分かり、責任の大きさに怖くなることがあった。 公立の保育園で実習をしました。ある程度、活動方針が決まっていたり、決まりがあって、それに沿って指導案を組むので保育者の柔軟なアイディアは受け入れてもらえるのか疑問に思いました。ここでの園では保育士の手作りおもちゃがＮＧだった。

た内容はなかった。

保育実習1回目で最も多い理由は、4つに整理したどれも様々な内容が述べられた。①保育者の子どもとのかかわりに関しては、「厳しい」「きつい」といった、子どもに対するマイナスの働きかけが数多く挙げられた。②保育者の実習生への態度についても同様である。冷たくされたり、邪魔にされたりということを保育者にされることをリアリティ・ショックとして感じているように思われた。③保育者同士の関係保育者に関することでも、関係の悪さを挙げるものが多かった職務に関しては、「思っていた以上」であることや、子どもと関わる以外の職務に対する驚きを感じる者が多く見られた。

教育実習におけるリアリティ・ショック（Table 8）に関して、保育実習1回目よりも量は少ないものの、職務に関して、保育所との違いを挙げる内容のものが数多くあった。

Table 8.　教育実習におけるリアリティ・ショックの内容

①保育者の子どもとのかかわり
4年目の先生が未就園児クラスの担当で、2歳児さんに対しての対応が親として許せなくて、子どもを預けることは難しいなあと思った。
子どもが軍隊みたいに動いていて怖かった。
②保育者の実習生への態度
担当の先生が割と厳しめな人で、冷たい対応をされ、幼稚園のイメージは正直自分の中で悪くなった。
母園でもあったが、どのように保育者と関わっていいのかわからなかった。
いろいろなことで怒られ、たくさん泣いた。幼稚園の先生たちは裏でいろいろとやっているのだと学んだ。
保育園では嫌な先生がいたのでそれが普通だと感じたが、幼稚園では皆が明るく、優しく、親身になって話も聞いていただけたので驚いた。
③保育者同士の関係
先生同士の中があまり良くない印象を受け、人間関係の面で自信がなくなった。
④職務
想定外の子どもの動きが多く、なかなか子どもたちに声をかけられなかった。
保護者トラブルがあり、先生も困っている様子だった。
保護者の対応で疲れた顔をしている先生の姿を見たため。
事務的な作業、その他雑務が予想を超えていた。
実習先の園は行事がたくさんあり、子どもの数も多く、先生への負担が多かった。
日々の保育準備、会議、行事準備など、子どもといる時間以外の仕事量に驚いた。
子どもと一緒にいる時間よりも、書類を書いている時間のほうが長く、精神的な余裕がなくなってしまう。
単に保育時間が違うだけでなく、幼稚園での教育的な指導が保育園とは違い、自分の保育観、ペースを全く違うと身を持って感じた。
実習に行ってからは、幼稚園＝朝から晩まで大変というイメージになった。
多くのクラスで実習を行ったため、子どもの名前を覚えきれず、親しくなる前に次のクラスに入らなければいけなかった。
子どもの人数によって、声の通り具合が大きく変わること。
子どもと保育者の前だと緊張して全くピアノが弾けなかった。
幼稚園児と保育園児の3歳の違い。

学生は、保育者や保育所・幼稚園に対して、「保育者とはこういうもの」「保育所・幼稚園とはこういうもの」いうイメージを持っており、それとは違うことが生じると、リアリティ・ショックを感じると思われた。

Ⅳ．考察

本研究は、学生が進路選択をする上での実習の重要性に注目した。特に、実習を積み重ねていく中でリアリティショック（谷川，2010）の概念を取り入れ、検討した。

本研究では、保育士資格と幼稚園教諭一種免許状を取得予定の者を対象とした。4年生の10月の時点で、保育所に就職を予定している者が若干多いものの、ほとんどの者が保育所・幼稚園に就職先を予定していた。就職先を決定する際、その決定に揺れがない者は少なかった。対象とした学生は、保育士資格・幼稚園教諭一種免許の取得を目指しており、学生の多くは最初からどちらかに進路を決めているというよりも、幼保どちらかに就職したいと考えていて、実習を行ってから決定する者がかなり多いと思われた。このことは、「幼保どちらか」と考えている学生の割合が教育実習前まであまり減少しないことから指摘することができる。

このような状況であると、実習に対して、どのようなイメージを持つかがその後の進路選択に大きな意味を持つのではないかと考えられる。特に、初めての実習におけるリアリティ・ショックを感じた者の割合がその後の実習におけるリアリティ・ショックを感じた者の割合よりも多かった。田爪・小泉（2009）が指摘したように、最初の保育実習において保育者が実習生をどう受け入れてくれるかがその後の進路の鍵となりそうである。

実習を積み重ねていく中で、学生は、進路に対してだけでなく、「保育」という職務に関しても明確になっていく。それが保育者アイデンティティの形成と呼べるものであろう。進路選択における記述の内容の深まりは、学生自身の成長、つまり、保育者アイデンティティの形成が進行していることも影響していると思われる。現に、進路選択の理由に関しても、実習が進むにつれて、その内容がより深まったものになっていた。

いずれにしても、保育実習・教育実習において、ほとんどの学生は、リアリティ・ショックを乗り越え、幼保どちらかの進路に決定していると思われた。谷川（2010）は、子ども理解の発展とショックからの回避という2つのプロセスのどちらかを経ると指摘している。今回の分析でも、リアリティ・ショックを経験したからといって保育士から幼稚園教諭、幼稚園教諭から保育士という進路変更をした者は存在するが、子どもとかかわる仕事、すなわち資格を生かした仕事そのものをやめてしまった者は少なかった。今回の分析では、最終的に進路先を決定する上でどのようなプロセスを経ているのかについては明らかにできていない。今後の課題としたい。

引用文献

小泉裕子・田爪宏二　2005　実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究：保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連　鎌倉女子大学紀要，12，13-23.

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長　2015　指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について.

松本学　2008　教育実習・保育実習における学生二年間の学生評価の考察　国際学院埼玉短期大学研究紀要，28，63-72.

大野和男・小泉裕子　2014　保育者アイデンティティの形成過程　鎌倉女子大学学術研究所報，14，35-40.

大野和男・小泉裕子　2016　保育者アイデンティティの形成過程　鎌倉女子大学学術研究所報，16，1 3-20.

田爪宏二・小泉裕子　2009　実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討，鎌倉女子大学紀要，16，13-23.

谷川夏実2010　幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容　保育学研究，48，2，96-106.

Marlene Kramer 1974 Reality Shock: Why Nurses

Leave Nursing. Saint Louis: C.V. Mosby Co. vii-viii.

謝辞

本論文は、後藤美柚さんの2014年度児童学部児童学科卒業論文として提出されたものを再分析・再構成したものです。そのことに深く感謝いたします。また、調査にご協力下さった学生の皆さんにもお礼申し上げます。

要旨

本研究は、幼幼稚園教諭一種免許状・保育士資格の資格を取得予定である42名の学生を対象とし、保育者アイデンティティを形成し、就職先を決定する上で重要な契機として実習前後の進路選択の理由、そして実習中のリアリティ・ショックについて検討した。学生は、就職先に関して、子どもに携わる仕事、即ち幼保のどちらかと考えているものが多く、全ての実習が終えてからどちらかに決めるという者の割合が最も高かった。

そして、実習中には、何らかのリアリティ・ショックを感じる者が多く、それは特に1回目の保育実習で感じた者が最も多かった。

しかし、ほとんどの学生は、そうしたリアリティ・ショックを乗り越え、幼保どちらかに就職を予定していた。

（2017年9月11日受稿）